

「これは、ただごとではない…」
 高台に住む五兵衛は、そうつぶや
 きながら、家から出てきました。
 今の地震は、激しくはありませ
 んですが、うなるような地鳴りと、
 長くゆっくり続いたゆれば、不気
 味なものでした。海を見ると、波
 が沖へ沖へと動いて、砂浜がどんど
 ん広がっています。



村人たちは地震のことよりも、お祭りに夢中な様子です。

「いかん、時間がないぞ…」

五兵衛は家に駆け込むと、大きな松明を持って、飛び出してきました。

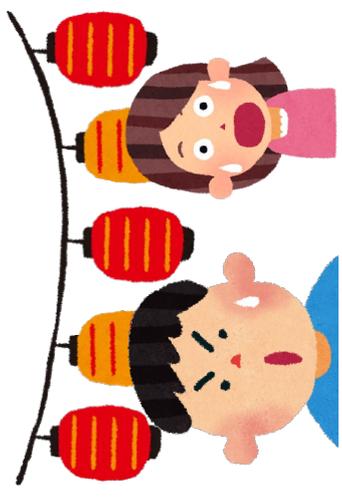
た。目の前の田んぼには、あとには取り入れられるばかりになっている。稲の束がたぐさん積んであります。

「もったいないが、やむをえん」

五兵衛は、稲むらの一つに火をつけました。風にあおられ、勢いよく火の手が上がります。「よし!!!」

田んぼを走り、すべての稲むらに火をつけて回りました。

「おまえさん、もう足元ふらふらだぞ」
 「ノンアルコールで酔っちゃったよ!？」
 今夜は、村の豊作を祝うお祭りです。たいこのリズムに合わせて、子供たちは踊りの練習です。大人たちは、お祭りの準備をしたり、お酒をのんだり…。



「あれ？あれれ！火事だぞ」

「五兵衛さんちの方向だわ」

若者たちが次々に走り出します。



山寺では、この火事に気づいて早鐘を打ち始めました。

原作：小泉 八雲
 挿絵：いらすとや



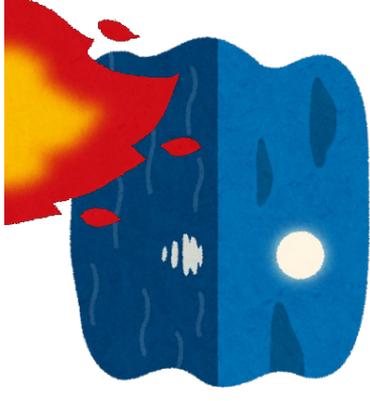
稲むらの火

若者たちが続いで、村のみんなが田んぼの炎を目指して駆け上がって来ます。けれども、高台から見下ろす五兵衛の目には、アリの歩みのように、遅く見えるのです。
 ようやく何人かの若者が水を手にして、やって来ました。
 「稲むらの火を消すな!! 村人全員をここに集めるのじや!!」



制作：パピルス・スカラビオ 2015年11月
 Powered by Ottee

波にえぐり取られ、跡形もなくなった村を、みんなは、ただ呆然と見下ろしていました。風にあおられ、稲むらの火がまた燃え上がります。この火によって命が救われたのだと人々は気づき、五兵衛の前にひざまずくのです。(終)



「見る、やって来たぞ…」

五兵衛の指さす方向を、村人たちはじっと見つめました。

「津波だ!!!」

絶壁のような海水が轟音と共に押し寄せ、自分たちの村の上を、行ったり来たり、荒れ狂っています。

